



「杜十娘」考：連環画『杜十娘』の諸相

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2013-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上原, 徳子, Uehara, Noriko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/4527">http://hdl.handle.net/10458/4527</a>

# 「杜十娘」考

## —連環画『杜十娘』の諸相—

上原徳子

### A Study on “Dushiniang” — Various aspects of the “Dushiniang” picture-story book —

Noriko UEHARA

#### 1 連環画「杜十娘」

連環画について、武田(2012)は次のように述べている。「連環画とは、小人書とも呼ばれ、民国期に生まれた、小さな劇画本である。一般に、横にしたはがきよりひとまわり小さいくらいのもので、1ページにつき絵が1枚描かれ、絵の下、あるいは左右いずれかに、文字説明が入る。フキダシを使う場合もある。<sup>1)</sup>そこに描かれるのは、多くが時代を反映し、政治的な思想を含むものである。

連環画の中に、『杜十娘』というものがある。杜十娘は妓女で、意中の人に巡り会えたと思つたのもつかの間、男に裏切られ最期には長江に身投げしたヒロインである。

筆者は、この物語がどのように受容されてきたのかを明らかにするために現在確認できる資料を一つ一つ検証するべきだと考え、これまで杜十娘の物語の原典とされる文言小説から、最も良く知られている白話小説、さらには、2003年公開の香港映画に至るまで考察してきた。

本稿はあくまでもその「杜十娘」(以下本稿では、白話小説に限らず彼女が登場する作品を総称してこう表記する)研究の立場から、「杜十娘」の表現の一つとして連環画をとりあげたい。なぜなら、この物語が中国で比較的知られている要因の一つに、手軽に読むことのできる連環画の存在があると考えているからである。

「杜十娘」は、現在でも高校の語文(国語)教科書にも古典作品として取り上げられるなど、その内容からしておよそ教育的とは思えない(なにしろ遊郭が舞台である)にも関わらず人口に膾炙した物語である。教科書の中の杜十娘については稿を改めて考察するとして<sup>2)</sup>、今回は筆者の手にある9種類の連環画『杜十娘』について考察する。「杜十娘」の受容については、まだ明らかにできていない部分も多い。中でも、これまで「杜十娘」をめぐる論考で連環画に触れたものは管見の限り見当たらない。

なお、これまで杜十娘を扱った連環画が正確にどれだけ存在しているのかは現在の所不明である。本稿が分析するのは、現在まで入手できた表1に挙げる9種の連環画であるが、今後増える可能性が無いとはいえないだろう。

下の表1は上から資料の発行年月日順に並べてあるが、古さでは、8→9→1→2→3→4→5→6→7の順となる<sup>3</sup>。なお、今後本稿で各本を分析する際は、表1の左端の数字で各本を示すこととする。

白話小説が連環画になったとき、何か違いが出たのか。さらには、連環画が政治的な性格を帯びやすいのであれば、これらにも何らかの思惑が付与されているのか、以上の二点について検討していきたい。もちろん9種の連環画の相違点と共通点についても考察していく。

【表1】

	発行年月	改編者	絵画 <sup>4</sup>	出版社	備考
1	1980. 11	刘仲舒	方隆昌	湖北人民出版社	
2	1980. 12	沙铁军	汪国新	四川人民出版社	
3	1981. 12	丁国联	山 林	安徽人民出版社	
4	1981. 7	管 荃	朱光玉	福建人民出版社	
5	1982. 12	金 戈		中国电影出版社	「电影连环画册」とあり
6	1983. 2	钱志清	肖侠・陈淦	上海人民美术出版社	
7	1988. 4	黄永东	陈挺通	岭南美术出版社	
8	2008. 12	新平・新英	房绍青	连环画出版社	元来は「人民美術出版社1955年3月出版」のもの <sup>5</sup>
9	2009. 4	伍未折	刘廷相	黑龙江美术出版社	元来は「1980年8月・辽宁美术出版社」発行のもの

## 2 白話小説「杜十娘」のあらすじ

連環画を分析する前に、まずはその元となっている白話小説（話し言葉に近い中国語で書かれた小説）のあらすじを知る必要があるだろう。杜十娘は『警世通言』巻32「杜十娘怒りて百寶の箱を沈むること」のヒロインである。連環画も、8以外は、冒頭の内容紹介の中で、それらが白話小説に基づいていることを記している。（記述が無い8も白話小説に基づいていることは明白である。）使用される語彙からも、連環画の「杜十娘」物語は、白話小説に拠っているのは間違いない。以下、本論の内容に関わるので『警世通言』に沿ってあらすじを紹介したい。なお、後の分析のため、あらすじはA～Fに区切っている。

A 明の万暦20（1592）年。科挙受験のために、紹興から北京の国子監に入学していた李甲は、遊郭で杜十娘という名妓に出会った。李甲は杜十娘に夢中になり、杜十娘も「従良（身請けされる）」の志があったので、気持ちがちが傾いた。2人は仲睦まじく夫婦のように過ごしたが、李甲は厳格な父を恐れ、なかなか杜十娘を落籍しようとしなかった。

B 1年がたち、李甲が手元不如意になってきたことで、杜十娘は妓院のやりて婆と口論になる。今や無一文の李甲の足元をみて、やりて婆は10日の期限を設け、300金を用意できれば、杜十娘を身請けさせてもいいと言う。李甲は、3日の間友人の間を駆け回ったが、一文も手に入らない。同郷の柳遇春に事情を話したところ、300金で名妓が手に入るなどは、妓女の客を追い払う手だという。杜十娘の元には帰れぬまま、6日目が終わるが、当ての無いまま李甲は杜十娘の元に帰ってきたのだった。

C 杜十娘は自分が密かに貯めた、銀150両を李甲に渡し、使うように言う。柳遇春はそれを知り、杜十娘の心根を誉め、李甲に150両を工面してやる。その結果、杜十娘は妓院を出ることができたのだ。杜十娘は、妓院の姉妹たちに別れを告げるが、その時姉妹は、杜十娘に鍵のかかった金泥の箱を手渡した。

D 2人は陸路の後、運河を南に下り、瓜州に到着した。明日いよいよ長江の対岸に渡るという夜、杜十娘が船上で歌ったところ、それを隣船の若い新安商人孫富が聞いていた。翌日、風雪に阻まれ船が止まっているところに、孫富は巧みな言葉で李甲を誘い、杜十娘を千金で自分に譲るように説得する。孫富の申し出に心を動かされた李甲は、ついに、杜十娘を千金で譲ることにする。その日、夜半まで李甲を待っていた杜十娘は、その話を聞くや、冷笑し、申し出を承諾、化粧を凝らして引き渡される時を待つのだ。

E 次の朝、杜十娘は船上に美しく着飾った妓女の姿で現れた。彼女は、多くの観衆を前に、金泥の箱の引き出しから宝石類を取り出しては河に投げ捨てた。小箱の中には彼女が蓄えた財宝が収められていたのだ。最後の小箱を捨てようとした時、李甲は泣き出し、彼女にすがりつく。孫富もまた彼女をなだめようとする。杜十娘は、李甲を押しつけ、孫富と李甲を罵った。結局、杜十娘は、最後の小箱を抱いたまま、水面に飛び込んだ。彼女の後には、男たちを殴りつけようとする人々の罵声と、逃げ去る二人の男がいた。

F 後日、故郷へ帰る柳遇春の前に杜十娘は姿を見せ、宝石の詰まった小箱を渡し札を述べるのだ。

### 3 各本の比較

#### 3.1 物語の評価

まず、各本が「杜十娘」をどのように評価しているのか、それが最もわかりやすい「内容紹介(内容紹介)」をみていく。表1の9種のうち、物語内容に対する評価が書かれているのは以下の5種である。以下初出時期が古い順に並べる。

9「杜十娘は愛情をもち忠節を尽くしていたが、人でなしに会ってしまった。(彼女の)不満ながらも譲歩する反面激しくも気高い態度には深く同情する一方、李甲の卑劣さと自分勝手さ、孫富のよこしまさと陰険さを激しく非難する。<sup>6)</sup>

2「杜十娘の悲劇は、封建的礼法と道徳への血の涙を流すような決死の告発なのだ。<sup>7)</sup>

3「彼女の死は、裏切りをした義に薄い人物への重みのある酷評であるだけでなく、封建制度への血の涙を流すような決死の告発なのである。<sup>8)</sup>

6「・・・死をもって搾取階級の罪悪に抗議している。<sup>9)</sup>

7「物語は、孫富・李甲らのようなうわべは儒者の衣冠を身につけた獣を酷評し、また封建社会では女性の地位がなく、ただ嫁ぐことを一生の頼りとしていたことを反映している。一旦間違った夫に嫁げば、悲劇がもたらされ、永遠の心残りとなるのである。<sup>10)</sup>

これらの評に共通するのは、杜十娘が悲劇のヒロインであり、李甲・孫富は悪の存在だということである。さらに、杜十娘の死は、「封建社会がもたらした悲劇」なのだという考え方がはっ

きりうち出されている。以上をまとめると「封建社会の犠牲となった女性」が「封建社会の上位階級に属した士大夫に裏切られ」「(おそらくは資本主義的を象徴する)商人に金に任せて弄ばれる」ものの、「我が身を犠牲とした激烈な抗議によって彼らを告発する」物語である、といえるだろう。「杜十娘」は、中華人民共和国成立後イデオロギー的に高く評価されてきた白話小説である。筆者はだからこそ現代の語文教科書に取り上げられたと推測している。なお、8のみが文革前、それ以外は文革終了後の発行である。「杜十娘」の物語の読者が読後に自分なりの感想を抱く前に、すでに物語の性格は決められている。このあらかじめ決められた評価は「杜十娘」物語を考えるときに忘れてはならない点であろう。

### 3.2 9人の杜十娘

図1は表1に挙げた9種の連環画の表紙である。

表紙を見比べると、1以外は皆杜十娘が投身自殺する直前の場面である。1も左隅に嘆き悲しむ李甲の姿、さらにまっすぐにこちらを見据える杜十娘の顔が描かれているところから、彼



【図1】

女の最期の場面だと推定できる。

表紙からはわからないものの、このうち、7の絵柄は5の影響を受けていることがわかる(図2)。両者の物語全体の構成は異なるが、7の登場人物(特に杜十娘)は容貌・服装共に映画と酷似している。図2は7の106番目の絵であるが、服装は異なるものの、図1に挙げた5の表紙に酷似している。ちなみに、映画は原作の白話小説とは異なる構成を持つが、7はそれを反映していない。映画と原作の相違点については以前筆者が詳しく述べたことがあるのでここでは詳しく述べない<sup>11</sup>。



【図2】

これら表紙からもわかるように、「杜十娘」物語の一番の見せ場は、前述あらずじ紹介の分類E部分である。また、1と5を除いては、すべて金泥の箱(つまり百宝の箱)を持っており、財宝の詰まった箱が彼女自身を象徴することを暗示している。



【図3】

上の図3は、左から順に1から7の杜十娘入水場面を並べたものである。(8・9についてはこの後図6・7に挙げた。)画面は、向きが異なる3と5、飛び込む瞬間を描いていない6以外はすべて同じ構図となっている。この場面と表紙から、9人の杜十娘には髪型の違いなどはあるもののほぼ同一のイメージで描かれていることがわかる。

以下で、各本を比較していく。

### 3.3 全体の構成の比較

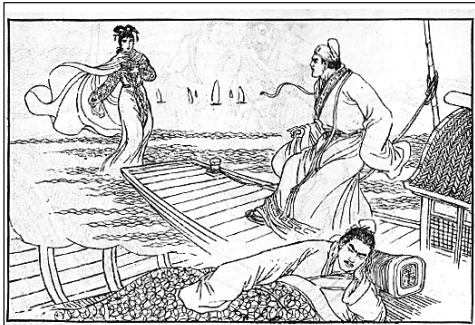
表2は各本の絵の枚数である。中でも突出して多いのが5であるが、これは映画をそのまま踏襲しているためである。映画は元の白話小説には無い要素が加えられているため長くなる。また、3は逆に突出して少ないが、そのためか物語が縮められており、原作と異なる部分がある。しかし、それらは細かな違いであり大筋は変わらない。

さらに、表3に9種それぞれが話のどの部分にどれだけ紙面を割いているかを割合で示した<sup>12</sup>。全てD部分が一番多い。Dは、北京を出てから孫富が李甲を説得するくだりを含むため長くなるのだろう。また、Fは杜十娘の死後の後日譚である。図4は、4だけが含む白話小説にみられる後日譚であり、李甲に150両用立てた友人柳遇春に、杜十娘が恩返しするため宝物の入った小箱を河中から拾わせ、夢で礼を述べるくだりである。(1の後日譚には宝の箱のくだりはない。)

物語では、E部分の最後に杜十娘が川に飛び込み、物語全体が終わりになり、彼女の死がより劇的で印象深くなる。その劇的効果を狙ったのか、それとも後日譚を不要で蛇足だと考えたのか、いずれにしても連環画の3分の2は因果応報の結

【表2】

1	94
2	96
3	70
4	108
5	147
6	102
7	107
8	88
9	90



106. 这一夜，他梦见江中有个美丽的女子，踏着水波前来。仔细一看，原来是杜十娘。



107. 杜十娘向他行了礼，诉说了李甲的薄情寡义，又说：“承蒙慷慨相助，本想安顿后，慢慢报答。想不到事与愿违，现以宝匣奉赠，聊表我一点心意。”

【図4】

本人の意志に反して）苦界に身を落としたという記述と大差が無い。3はさらに踏み込んで「もともと良家の子女で、両親が亡くなったため、13歳の時に誘拐され、苦界に身を落とすことになってしまった<sup>13</sup>」と詳しく述べる。また、9は両親の死後、「13歳の時に叔父に売られた」とある。5には直接の記述は無い（映画には暗示的な場面はあるのだが）。

3の彼女が良家の出身であるという情報は読者の同情を誘うため付加されたのだろう。

さらに、読者の同情を誘う付け加えとして、図5を指摘しておきたい。これは、唯一8にのみみられるもので、杜十娘が思い描く理想の生活である。これを挿入することによって読者は、より具体的に彼女が奪われたものをイメージできるようになる。

表紙の分析からも明らかであるが、この物語は結末が最も重要である（極端なことをいえばそれだけでも成立しうる構造である）ことは疑う余地が無いだろう。では、その部分を各本ではどのように描いているのだろうか。

表3

	A	B	C	D	E	F
8	10.2	14.8	18.2	43.2	13.6	0
9	17.8	14.4	18.9	36.7	12.2	0
1	5.3	14.9	25.5	37.2	13.8	3.2
2	4.2	20.8	2.04	36.5	13.5	0
3	7.1	27.1	14.3	31.4	20.0	0
4	9.3	13.9	24.1	29.6	15.7	6.5
5	14.3	19.7	18.4	3.02	15.6	0
6	12.7	26.5	14.7	31.4	12.7	2
7	5.6	19.6	20.6	32.7	21.5	0

末を示すF部分をもたない。白話小説が有していた因果応報の考えは、連環画では重要視されず、それよりも杜十娘の自殺という衝撃的な結末が支持されたといえる。

その他にみられる各本の細かな違いについて述べてみたい。

まず、一部、杜十娘が苦界に身を沈める前の境遇について述べているものがみられる。これについて白話小説には特に記述は無いが、この部分が付け加えられると彼女の境遇はより悲劇性を帯びる。8・1・2・4・6・7は白話小説の杜十娘が13歳で不幸にも（すなわち天涯孤独となっ



74 又想到李甲托人劝解了父母，回家恩爱，生儿育女，和李甲白头偕老。

【図5】

### 3.4 杜十娘の死の描かれ方

ここでは、9種の中で最も早い8(図6)とその次の9(図7)で、杜十娘の最期の場面を詳しくみてみたい。

いずれも、杜十娘が衆人環視の状態です孫富と李甲を非難し、蓄えて隠し持っていた宝石を河に放り投げてみせ、最期には河に身を投げる場面である。



86 十娘轉臉向岸上的人說：“大家看見了，我一片真心對李甲，我對李甲反把把心賣了。是我對不起他……”



87 十娘氣絕，他的險氣撒開了。他心裏想：“我對李甲，我對李甲反把把心賣了。是我對不起他……”

【図6】



88 十娘痛罵孫富：“你以好理之慮，被人騙得，我死后化為厲鬼，必不饒你！”孫富連連后退，不敢開口。



88 十娘悲憤欲絕，仰天高呼：“十娘敬告世人，非貴樓妓女李甲，乃官宦公子負十娘也！”說罷，將幾百寶石，一跌跳進長江。但見云暗江心，波濤滾滾。眾公侯舉動，已皆无影，眾人皆頓足嘆息。

【図7】

ここでは、杜十娘の怒りの表情が細やかに描かれる。それに対して非難される孫富と李甲は意気消沈している。また、図7では、背景も嵐の様相を帯び、雰囲気を一っそう盛り上げている。

白話小説においてこの場面の杜十娘の言葉は、次の通りである。

〔孫富に対して〕

私と李だんなさまはつぶさに辛酸をなめ、ここに至るには容易ではなかったのです。あなたはみだらな思いで巧みにでたらめを吹き込んだのですね。人の縁談を壊し、愛情を台無しにしたからには、あなたは私の仇敵です。死んでも忘れません。かならず神に訴えます。それでもなお男女の楽しみを妄想するのですか<sup>14</sup>。

〔李甲に対して〕

私が苦界に身を沈めて数年、密かに蓄えを行ったのは、一生のことに備えのことでした。



だんなさまにお会いしてから、変わらぬ愛を誓い、共白髪までと思ってきました。先に都を出ます際、私の（姪女仲間の）姉妹たちから送ってくれたと見せかけた箱の中にはたくさんの宝が隠されており、価値は万金を下りません。もしあなたの身なりを整え、帰ってお父様お母様にお目見えしたら、（お父様お母様に）私をお哀れみになる心があったかもしれません。そして、蓄えを何かの助けにお納めいただければ、一生の願いが叶うことになり、死んでも悔いがないと思っておりました。旦那様のご信頼は浅く、浮ついた言葉に惑わされ、道半ばにして私を見捨てて、私の真心に背くなど誰が知っていたでしょうか。今日は皆様の前で箱を開けてお見せし、旦那様に（私を孫富に売って得た）わずかな千金はたいしたことが無いことを知っていただきました。私の箱の中には宝石がありました、残念なことにあなたの見る目には宝石が無かった。運が悪いことに、苦界で辛酸をなめ、やっとそこから逃れたと思ったら、また棄てられる。

〔観衆に対して〕

今みなさまの目と耳が証明となります。私がだんなさまに背いたのでは無く、旦那様が私に背いたのです。<sup>15</sup>

読者はこの部分を読んだだけで、物語の大部分を理解できるだろう。杜十娘が男2人を非難する台詞はこれまでの経緯を総括し、加害者と被害者を明確にする役目も持つ。

一方8では杜十娘の言葉はより簡潔な上、原作には無い台詞をも語る。

〔李甲に対して〕

私はあなたを思いやりのある方だと思っていましたが、あなたは人の顔をした獣だったのです。今私は完全に悟りました。私たちは永遠に一緒にいることはできないのです。<sup>16</sup>

〔孫富に対して〕

あなたは自分にお金があるから私を買えると思ったのですか。あなたは何も見えていない。私は死んでもあなたたちのような人を楽しみを与えたりするものですか。<sup>17</sup>

〔観衆に対して〕

みなさまご覧になりましたでしょう。私は真心で李甲さまにお仕えしましたが、李甲さまはあべこべに私を売ったのです。彼が私に申し訳ないのであって、私が彼に申し訳ないのでありません……<sup>18</sup>

ここでは特に、李甲に対して、杜十娘が愛想を尽かした心境がストレートに述べられているといえよう。原作からの大きな内容的逸脱はないが、使われている言葉は平易である。これに対して、9は白話小説の語彙を時にそのまま使用しながら簡潔に述べている。

〔孫富に対して〕

あなたはみだらな思いで人の縁談を壊しました。私は死んだら悪霊となり絶対にあなたを許しません。<sup>19</sup>

〔李甲に対して〕

私は不幸にも苦界に身を落とし、長く良い人に巡り会いたいという思いを抱いていました。平素からたくさん蓄えをして、緊急事態に備えていました。私の目には宝石は無く、あなた

を見誤ってしまいました。自由の身となったというのに、棄てられてしまうところです。お尋ねしますが、あのわずかな千金は私の箱の中の貴重な宝物よりも価値が軽いでしょうか、それとも重いでしょうか。<sup>20</sup>

〔観衆に対して〕

私杜十娘は世の人に申し上げさせていただきます。青樓の妓女が李甲に背いたのでは無く、官吏のご子息が杜十娘に背いたのです。<sup>21</sup>

この場面については、8のタイプと9のタイプに集約できる。白話小説よりも8の方がより直接的な表現で相手を非難しておりわかりやすい。これに類するのが5と7である。その他は9に類する。また、画面については、8は杜十娘が李甲と孫富を指さしてののしるだけではなく、周囲の人に向かって話す場面もある。他に、観衆へ語りかける様子をはっきり描かれているのは4である。また、1・2・5・7は天を仰いで話す場面が描かれる。

以前から指摘があることであるが、ここで杜十娘が観衆に語る言葉は読者に向けられたものである。読者はこちら側に向かって語りかける杜十娘の姿を見ながら彼女の主張を読むことになり、よりその実感がわくだろう。また、8が小説よりも明確な言葉を用いて李甲に決別を宣言させているのは興味深い。唯一のよりどころであった李甲との決別が生との決別でもある杜十娘の境遇を際立たせる描写だといえないだろうか。

### 3.5 商人 孫富の描かれ方

これまでみてきたように、連環画は読者に文章だけでなく絵でも情報を伝える。そこで、次に杜十娘を悲劇に導いた元凶である李甲に杜十娘を売らせた塩商人孫富の表現のされ方に注目したい。

孫富は、白話小説では、「徽州新安の人。家は巨万の富を持ち、代々揚州で塩商をしていました。ちょうど20歳で、南京国子監の学生でした。生来の色好みで妓樓で女性を追いかけることが当たり前で、女性を弄ぶことなどなんともない軽薄な若者でした<sup>22</sup>。」とされている。

図8に挙げた9人の孫富を比較すると、白話小説中の表現に最も近いのは8だと思われる。9・3・4は、やせぎすで狡猾な感じが強い。1・2・5・6・7は、ふっくらとし、表向きは人が良さそうだが陰では賢そうな人物に描かれている。しかし、全体として原作にある孫富の若さが考慮されておらず、悪役としての表現が優先されている。後日譚がすべて描かれる4を見



↑ 8



↑ 9



↑ 3



↑ 4



【図8】

ていると、図9右のように孫富は最後まで徹底的な憎まれ役である。

孫富との比較の対象として、図9左に4の李甲の後日譚部分を挙げたが、物語の中でいかにも情けない負心の男として描かれていても李甲はあくまで中国の伝統的美男としての容姿を保っている。



【図9】

孫富は、国子監の学生であり大富豪でもあり、物語の中では士大夫階級と商人という二つのイデオロギー的に負の要素を持つ。さらに、李甲をそそのかして2人の仲を裂く行動も読者の非難の対象である。連環画の読者にとって最も唾棄すべき人間だろう。連環画中の彼の容貌も、読者をそのように誘導する要因となっているといえる。

ただし、以上のように元となった白話小説の描写とは必ずしも一致しない孫富の容貌から、連環画中の人物の描き方には一定の型があり、その人物の属性によって書き分けられていることが考えられる。しかし、さらに多くの連環画を比較する、あるいは作家別の考察を行う必要もあり、ここではこれ以上触れない。

#### 4 おわりに

本稿は、9種の連環画『杜十娘』を比較検討してきた。

白話小説と連環画の相違点であるが、一部に杜十娘の出自について「良家の娘」という要素が加えられたものがあったものの、すべて物語の構成は変わらなかった（ただし、映画に基づ

いたものは物語構成に異同がある)。絵に添えられた文章は、原作の語彙をそのまま用いながら、簡潔にのべている。また、李甲と孫富の末路について触れたものは数種類あっても杜十娘が死後恩を返す後日譚については、一種類しか描いていなかった。これは、編集者が白話小説が持つ因果応報の構造を維持せず、より劇的な幕切れを選択していることを示しているだろう。さらに、ヒロイン杜十娘の描き方に大きな差異は見られないが、最期の場面については、台詞が白話小説よりもより直接的表現になっているものもみられた。

物語は、抑圧された悲劇の女性である妓女杜十娘が自由を手にしたにもかかわらず、社会的に地位の高い(科挙官僚を目指す)男達によってその幸せを奪われるという構造でとらえられており、内容紹介で「封建社会」という言葉を用いてより政治的な物語の色合いを持たされる傾向が見られた。

また、9種の連環画相互の関係については、7は絵柄に5からの影響が認められるものの、内容では両者の関連は認められない。7と5以外にも互いに関連があるという形跡は確認できなかった。

本稿で取り上げた連環画『杜十娘』は、明末の文言小説・白話小説とも、また戯曲・映画とも異なる形態であり、これまで顧みられてこなかった分野である。今回は、物語の全ての場面について詳細に検討を加えることはできなかったが、その傾向はある程度明確にできたのではないだろうか。また、連環画から白話小説よりもさらに庶民寄りの「杜十娘」物語の形を知ることができたともいえるだろう。

いずれにしても、「杜十娘」の受容については、民国期を挟んで、それ以前と以後について詳細に考察する必要があるが、本稿の連環画についての考察は、中華人民共和国成立後から、80年代末までの受容状況を知る上で欠くことのできない一要素であるといえるだろう。

(2012年10月9日受理)

## 注

- 1 武田雅哉「褻翫すべくして遠観すべからず—愛連の説」『連環画研究』第1号 北海道大学連環画研究会 (pp.2-3) 2012年3月
- 2 これについては、筆者が2010年8月に2010年度中国古典小説研究会大会において「白話小説の読まれ方—「杜十娘」の場合」と題して発表した。しかし、まだ資料が不十分であり論文化していない。
- 3 連環画が出版社を変え新たに発行されている場合、もとの文章を変えている可能性はあるが、現在古い版を確認する方法がない。ここでは、もとの文章がそのまま採録されているとみなして分析する。
- 4 なお、表紙は別人が担当している場合が多い。作者を明記しているものもあるが、何も書いていないものもあり確認は難しい。
- 5 2002年10月連環画出版社発行の『杜十娘』の内容説明による。その内容は8に挙げたものと全く同じである。本来であれば、発行年がより早い方を資料として用いるべきであるが、2002年版はサイズが一回り大きく、表紙の形態も異なっているため比較にふさわしくないと考え、8に挙げたものを採用した。
- 6 故事对杜十娘爱情忠贞，却所遇非人，委屈求全又烈性不苟，予以深切同情；对李甲之卑怯自私，孙富之邪恶阴险，则予以痛斥。

- 7 杜十娘的悲剧，是对封建礼法和道德的血泪控诉。
- 8 她的死不仅是对负心薄义人的有力鞭挞，也是对封建制度的血泪控诉。
- 9 以死来抗议剥削阶级的罪恶。
- 10 故事鞭挞了孙富、李甲等这类貌似斯文的衣冠禽兽；也反映了在封建社会中，妇女没有地位，只能把嫁人作为终身依托。一旦嫁错了郎、就会酿成悲剧，以致千古遗恨。
- 11 伊藤徳子「映像の中の「杜十娘」—古典小説の映画化の一つの形」  
『映像と文学 平成8年教育研究学内特別経費に係るプロジェクト外国語教育・日本語教育における映像・音声教材有効利用に関する研究報告書』奈良女子大学文学部言語文化学科言語情報学研究室 (pp.40-44) 1997年3月
- 12 表で挙げた数字は、小数点以下第二位を四捨五入したものである。したがって合計が100パーセントではないこともある。
- 13 原是良家女子，因父母俱亡，3岁那年，被人拐骗，误落风尘罗网。(2) ( )内の数字は何枚目の絵についての説明なのかを指す。
- 14 我与李郎备尝艰苦，不是容易到此。汝以奸淫之意，巧为谗说，一旦破人姻缘，断人恩爱，乃我之仇人。我死而有知，必当诉之神明，尚妄想枕席之欢乎。(以下本稿では白話小説の本文について、『警世通言』(北京十月文艺出版社1994年)を使用する。)
- 15 妾风尘数年，私有所积，本为终身之计。自遇郎君，山盟海誓，白首不渝。前出都之际，假托众姊妹相赠，箱中韞藏百宝，不下万金，将润色郎君之装，归见父母，或怜妾有心，收佐中馈，得终委托，生死无憾。谁知郎君相信不深，惑于浮议，中道见弃，负妾一片真心。今日当众目之前，开箱出视，使郎君知区区千金，未为难事。妾篋中有玉，恨郎眼内无珠。命之不辰，风尘困瘁，甫得脱离，又遭弃捐。今众人各有耳目，共作证明，妾不负郎君，郎君自负妾耳。
- 16 我把你当成知心知意的人，哪向你原是人面兽心的东西！现在我完全明白了，我们是永远不能在一起的！（84）
- 17 你认为你有权就能买到我吗？你的眼睛瞎了，我死也在不供你们这种人取乐！（85）
- 18 大家都看见了，我一片真心对待李甲，李甲反把我卖了，是他对不起我，不是我对不起他……（86）
- 19 你以奸淫之意，坏人姻缘，我死后化为厉鬼，必不饶你！（86）
- 20 我不幸堕入青楼人之想。平素多有积蓄，以备用于急难。我有眼无珠，错认了你。方出水火，有遭遗弃。试问那区区千金，比我箱中珍宝，谁轻谁重？（87）
- 21 十娘敢告世人，非青楼妓女负李甲；乃官宦公子负十娘也！（88）
- 22 徽州新安人氏。家资巨万，积祖扬州种盐。年方二十，也是南雍中朋友。生性风流，惯向青楼买笑，红粉追欢，若嘲风弄月，到是个轻薄的头儿。